
とある世界の天才ハッカー

電子の鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の天才ハッカー

【Nコード】

N8495X

【作者名】

電子の鷹

【あらすじ】

西暦2030年。

経済が発達し、機械開発が進み、人類は豊かな生活を手にしていた。そんな世界では超能力が目をつけられ、ある場所で研究が進められていた。そんな場所でレベル0の一人のハッカーが能力者たちに立ち向かっていくストーリー。

プロローグ（前書き）

この小説に出てくるハッキングなどは法律で禁止されている行為ですので、しないで下さい。

プロローグ

登場人物

あまさわないと

・天沢七威斗

高校生でありながら裏社会で行きている青年。天才ハッカー

で色々な仕事を請け負っている。レベル0

かみじょうつまま

・上条当麻

原作にも出てくるイマジンプレードの持ち主。主人公とは同

じ寮に住み、友人。レベル0

えんどうさおり

・遠藤沙織

主人公の幼なじみ。レベル3

俺が生まれてからもう16年たった。

しかし、俺の生きている世界は何ひとつ変わらない。そんな俺は10歳の時にパソコンに出会った。その中には俺の知らない世界が広がっていた。それから俺はパソコンにハマリ、もっと奥を、さらに奥をと電腦世界のすべてを知ろうとした。

だが、この機械文明が発達した世界でセキュリティがかかっているモノは現実にもどこにも無い。そして俺はセキュリティを突破する技術を自然に身につけていった。そして13歳の時からネットの中ではいつのまにか伝説的な存在になっていた。そして時々、「仕事を請け負ってほしい」と自分のメールサーバーにメールがくるようになった。そのほとんどが会社などにハッキングをしかけ、デー

タを盗んでくるというモノだった。だが、たまに「このプログラムのバグを修正してほしい」などの仕事も来る事があった。

そしてそんな事をしているうちに俺は高校生になろうとしていた。

プロローグ（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
これからも読んでください。

第1話 怪しいまえぶれ・・・（前書き）

2回目の投稿です、まだなれないところがありオカシイところもありますが。お楽しみ下さい。

第1話 怪しいまえぶれ・・・

入学式前日。。。

「ふああ。。」俺はさっそく大きなあくびをかましていた。昨日までに完成させなければいけないモノが全く終わらなかったからだ。

「なんであんな仕事を引き受けたんだろうか」と回想を始めた。。

そう。あれは午前3時。もう夜中でそろそろ寝なければと思っていた頃に自分のpcにメールが届いた。差出人はある大企業だった。内容はプログラムの修正だったが、俺はそのプログラムの内容が気に入らなかった。なぜなら「超能力・人間の演算能力限界点計測プログラム」という内容だったからだ。しかし、さすが大企業、報酬がそれなりだったので仕方なく受ける事にした。

そして今に至るという事だ。まあ、報酬はしっかりと戴いたから文句はいわないが。

「眠いなあ」

そして俺は今、東京にある経済特区「学園都市」にいる。俺は普通の高校に進みたかったのだが、俺の親は両親どちらも既に他界しているので政府のお世話になるしかないのだ。まあ、大部分は自分で稼いでいるので生活に問題は無いが、さすがに生活費＋高校についての諸々はきついので政府のお世話になっている。

住む場所は既に決まっっていて学校側の寮に住む事になっている。

そして俺は今そこに向かっている。

その寮はなぜかとても立地が良く、駅から歩いて10分もかからなかった。

俺の部屋は501号室だったはずなので5階だ、エレベーターに乗り5階を目指す。

そして5階。

「チンツ」と小気味がいい音がした後にドアが開く。

エレベータをでてすぐ隣が俺の部屋のはずだ。

「501号室・・・ここか。」

鍵を開け、中に入ると荷物がもう既に運び込まれていた。おそらく学校側が引っ越し業者を中に入れたのだろう。

段ボールが部屋の端に重なっていた。

なかなか広く、開放感もある。さっそく自分の仕事道具をダンボールから出す。

デスクトップpcをセットし、電源を入れる。

ノートpcの方は自分がいつも持ち運んでいるので、鞆からケーブルを出してコンセントにつなぎ、ノートpcを繋げる。

プロパイダの契約は学校側がしてくれているのでさっそくネットに

繋げた。

ニュースを読み。メールをチェックした。

「うん？メールがあるぞ。」

俺は早速そのメールを開こうとした。が・・・

「あれ？パスワードがかかってる。」

メールにパスワードをかけるなんてまずないだろう。どうせ仕事関係の話だろうと思い。パスワードを解析し始める。このテのメールは多いので俺にとっては簡単にあけられる。

「よし。中身はツと」（カチカチッ）

メールを開いた、が・・・

そのメールはさらに暗号化されていた。

「パスワードをかけて、メールの中身にも暗号化をするなんてよほどのセキュリティではない。どこからだ？」

そんな疑問を抱えながらも暗号キーを探し始める。

数十秒後。暗号キーを発見し、中身を開く。

その中には「あなたにある仕事を依頼したい。その気があるのなら明日の午後2時に000-*****-@@@@この番号まで電話して来てください」

と、書いてあった。自分は話だけでも聞く主義なので変声機プログラムをノートpcにセットしておいた。

しかし、明日は入学式だ。

「しょうがない。学校が終わるのが午後1時だから家に帰ってから電話する余裕はないな。その辺の公園でするか。」

と考えて部屋を片付け始める。

そしてこの時は自分がまだ、重大な事件に巻き込まれようとしていないことは考えもしなかった。。。

第1話 怪しいまえぶれ・・・（後書き）

えゝ、ありきたりな終わり方でスイマセン。

かなりの駄文ですが今回もご愛読ありがとうございました。

次回もよろしく願いします！

第2話 入学式当日

この日、俺は朝から後悔していた。

なぜなら昨日の出来事の後、某掲示板を見ていたら興味深い内容を目にせずと見ていたからだ。

その内容は「学園都市内での都市伝説」というモノだった。

学園都市にいる者なら少しは気にはなるだろう。

そして今日はその学園都市で一斉に各学校で入学式が開催される日だ。

俺の通う高校は結構人気のある学校で偏差値も結構上のほうだった。しかし、自分は意外と頭がいい方なので難なく入る事ができた。

そして学校に向かう電車に乗ると、すぐに後ろから衝撃がきた。「おっす！（ドンッ！）」といって背中をたたいてきたやつは同じ寮に住む上条 当麻だった。

「なんだよ、辛気くさい顔してさ」といって話かけて来た。

俺は「うるさいなあ。合って次の日からこの絡みかよ」とツッコんだ。

しかし当麻は「いいじゃんいいじゃん。スキンシップは大切だよ。」と一人楽しそうだった。

そして学校に到着。

校長の挨拶などスムーズに式が進み、終わったのは12時だった。

「意外と早く終わったな」

と一人どうしようか悩んでいると当麻が「飯食いにいこうぜ」といって肩をくんできた。

特に断る理由がないので「OK。行こう」と応じた。

当麻とファストフード店に入り、窓側の席をとり昼食をとる。

「そういえば天沢って家で何してんの？」

「そうだな。本読んだり、TV見たりかな。」

「へえ、意外と普通なんだな。」

俺は心の中で何を期待していたんだろう、と考えながらも口に出すのはやめた。

そして時間は午後1時半を過ぎていた。

（そろそろ時間だな。。）

「当麻、俺用事があるから帰るよ。」

「そうか、また明日な。」

「おう」

そして当麻と別れ、近くの自然公園へ向かう。

大きな自然公園は意外と人が来なさそうなところが多いものだ。その考えは当たり、木の陰になった草の上へ腰を下ろす。そして鞆からノートpcを出して電源を入れた。

（フイイン）

と乾いた音を出しノートpcは起動した。

そして近くのアクセスポイントへハッキングをし、ネットにつないだ。

耳にヘッドフォンをしてアプリを起動した。

その後pcに昨日のメールにあった番号をpcに入力する。

（プルルルッ、プルルルッ）

何回かの呼び出し音の後、（カチャッ）。

？「お電話お待ちしていました。」と言われた。

七威斗「で、その依頼したいという仕事の内容は？」と変成器をとおした声で話しかける。

？「ええ、ある企業のサーバーへハッキングをしかけて戴きたい。」

七威斗「で、何をするんです？」

？「ただ、攻撃を仕掛けて戴きたい。それだけです」

七威斗「？それだけ？」

？「はい。そうです。報酬は一千万でどうでしょうか」

七威斗「（一千万・・・一企業が裏の仕事に一千万を払う余裕があるのか？）」

と疑問を抱いた。だが、こんなに簡単に報酬がこんなに。。。何か裏があるのか？

七威斗「分かった。仕事を引き受けましょう。」

？「ありがとうございます。では、仕事は今週の金曜日までにお願いします。」

七威斗「分かりました。」

？「それでは、土曜日にまたお電話を下さい。失礼します。」

（プツ・・・ツ、ツ）

七威斗「なんか引つかかるなあ。ま、いいか。」

今日は土曜日、丁度一週間か。

とりあえず帰ろう。

〳〳帰路〳〳

七威斗「それにしてもあの声の主は何者なんだ？」

比較的声音は若くて、20歳前半だろう。

とりあえず明日は学校の登校日だ。

今日は帰ってゆっくり休もう。

第3話 宿敵登場――前半――（前書き）

ここから少しずつ原作の人物を登場させていきます。

では、どうぞ！

第3話 宿敵登場――前半――

入学式から2日後・・・

今日は月曜日、今日から普通通りの授業が始まる。俺は憂鬱な気分
で学校への電車に乗っていた。

「カバン重い」と俺は心の中で呻いた。

なんてったって今日は7時間授業。持っていく教科書も多い。昨日
は自動防御プログラムを作り終えたところで寝てしまったのだ。な
ので朝飯も食えずに俺は家を飛び出した。しかし、電車に乗ってか
ら気づいたが時間に余裕があった。

「朝からホントに最悪な一日だな。」そんな時一人の少女が電車の
窓越しに自分の視界に入った。そして次の瞬間・・・消えた。

「テレポーターか。いいよなあ、便利で。」心の叫びを口だし、そ
のまま電車を降りて学校への道のりを歩き始める。そんな時後ろか
ら声をかけられる。

「おはようございます。」透き通った声で挨拶された。その声の主
は遠藤 沙織。小学校からの幼なじみだ。自分が学園都市に入学す
ると決まったら沙織も偶然学園都市への入学が決まっていたのだ。

そして僕も「おはよう。沙織はこの時間に学校へ来てるんだ？」と
返した。

「うん。子の時間が一番いいと思って。」

「俺は駅前の寮だよ。」と、僕は無愛想に返した。

しかし、沙織は気にすることなく「そうなんだ。なら、今日の放課後に一緒に帰らない?」

僕は「え?」と呆氣にとられた声で返事をした。

「あ、嫌なら別にいいんだけど・・・」と俯き加減で返す。

「いや、俺は全然かまわないけど。」と返した瞬間。

「ホント? やった。じゃあ今日の放課後に校門の前で待っていてね。」

それじゃあ。と言って沙織は昇降口の中へ消えて行った。

「なんなんだ? いったい。」そして時計を見て「やっべ! そろそろ俺もまずいな」と焦りながら教室へ向かう。

〓〓昼休み〓〓

上条が近づいてきた「よお、初日から遅かったな。」

「お前に言われたくはない。」素っ気なく言い返す。

「そんなこと言っなよ」。飯食いにいこうぜ!」と肩に手を回してくる。

「おう。」と言いつつ席を立つ。

「ところで今度お前の部屋に遊びに行ってもいいか?」

「ああ、別にいいよ。俺も上条の家に行ってみたいんだけど。」

そう言うと上条は少し困った顔で「いや、俺の家はちょっと……と言葉を濁した。」

「まあ、いいけど。」と言い俺は購買へ向かう。

そしてパンを買い屋上へ向かう。

屋上の扉を開けるとそこには誰もいなかった。空は快晴。

「昼寝日和だなあ。」と上条は手を広げる。

「5限目サボっちゃうか。」と俺は空を見ながら言う。

そして音楽プレイヤーをポケットから取り出しイヤホンを耳につける。

そして電源を入れ、耳に音楽が流れ始める。上条を見ると……もう寝ている。

焼きそばパンを食べつつ音楽に聞き入る。

そして、（キンコーン）と、昼休みの終了を教えるチャイムがなった。

俺は上条を起こす。「おい、上条。起きろ。」

「ああ、もう終わったのか」と上条が起きる。

「よし。じゃあ、早く教室行こうぜ」とイヤホンを外し屋上を出る。

～～～教室～～～

5 限目の授業は古典。

6 限目の授業は歴史。

7 限目の授業は数学。

～～～放課後～～～

校門の前に行くにはまだ少し早いので屋上に行きノートパソコンを開く。そしてusbをpcにさしこみ起動する。間もなく自作OSであるswallowが起動する。ターミナルを開き、コマンドを入力していく。周囲のアクセスポイントを検索し、ハッキングする。そしてネットに接続し、踏み台を何個か学校のサーバーに侵入する。無事成功。そして生徒名簿と教職員名簿を入手し、ログを消す。そしてハッキング終了。

入手した生徒名簿を開き、自分のデータベースに登録しておく。そ

して遠藤沙織の名前を検索する。検索結果では2組だった。自分は5組なのでかなり離れている。

そのままswallowをシャットダウンしてpcをカバンにしま
う。

時計を見ると4時を回っている。慌てて屋上から校門を見るとすでに沙織がいた。そして沙織がこっちに気づいたのか、こっちにむかつて手を振ってくる。俺は急いで階段を駆け下りた。

「はあ、はあ。ごめん。まった？・・・よね。」

「ごめん。」と素直にあやまると。沙織は「ううん、いいの。こうしてちゃんと来てくれたから。」と笑ってくれた。

「ありがとう。」と言う。

「じゃあ、帰ろう。」

「うん。」

そして電車に乗り、たわいもない会話をしながら電車を降りた。

そうすると沙織が「ね、ねえ。」

「ん？なに？」

「あのさ、七威斗って好きな人とかできた？」と聞いてきた。

「え！？」と聞き返した。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「だから！好きな人とかできた？」

「いや、いないけど」

「そっか。」と安心そうに息を吐いた。

その瞬間「はっ、いや。あの・・・ちょっと興味本位でさ」

「そっか・・・」

そうしてるうちに寮の前についた。

「沙織はどこに住んでるの？」

「私はここの401号室だよ。」

「同じ寮かよ！」

「そうだよ。でさ、明日は一緒に学校へ行かない？」と照れながらも言ってきた。

「うん。俺はいいよ。」と微笑んだ。

「ありがと。それじゃ、また明日ね」

「うん。」そして俺も自分の部屋へと向かう。

「今日はいろいろなことがあったな。」と言いながらデスクトップpcの電源を入れる

（サーバー内に侵入者あり）

「え？。まあ、あとであとで対処しておけばいいか。ほとんどはプログラムがやってくれるし」

（防壁1突破されました）

（防壁2突破。プログラム破壊されました）

「まずい、これは相当なヤツだ。」

第3話 宿敵登場――前半――（後書き）

と、まあ微妙な終わり方ですが。

次回にはこの続きからいきます。

そしてついにヒロインが参戦。序盤に出てきた人は原作を知っている人ならお分かりでしょう。

それでは、ありがとうございました。次回もお読みください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8495x/>

とある世界の天才ハッカー

2011年11月29日22時46分発行